

鈴鹿市が徴収ダントツ

2年連続、三重地方税管理回収機構

一昨年から始まった地方税徴収のための組織・「三重地方税管理回収機構」の、平成17年度実績が出されました。この機構は、県下の市町村の滞納税のうち、「大口で悪質」とされるものを市町村に代わって徴収する専門機関です。

その実績を見ると、各市町村から移管された引受額（滞納税）にたいする徴収率は、27.5%ですが、そのうち鈴鹿市分だけが異常に大きくて63.6%となっています。鈴鹿市を除いた平均は20.5%、その3倍もの数字です。

管理回収機構の平成17年度分徴収実績

	引受件数	引受金額	徴収金額	徴収率
鈴鹿市	50件	332,505千円	211,572千円	63.6%
全市町村	743件	2,037,060	560,871	27.5%
同（鈴鹿除く）	693件	1,704,555	349,299	20.5%

管理回収機構・鈴鹿市分と他市の徴収率比較（%）

年度	鈴鹿市	桑名市	いなべ市	四日市市	亀山市	津市
H17	63.6	43.4	51.0	26.1	25.2	17.3
H16	60.8	40.9	21.3	10.8	0.0	12.8

回収機構が徴収した税のうち、約4割が鈴鹿市分で、いわば「鈴鹿市は回収機構の上得意客」、あるいは「回収機構は鈴鹿市のために存在する」という異常な関係が見られます。

最大の疑問は、「回収機構に送ったら6割以上が1年以内に解決」という滞納が、果たして本当に「悪質」な案件だったのか？ということです。

三重県行政はシャープの使い走りか？

7月18日の市議会各派代表者会議で、議長より県企業庁から「三重用水取水問題」での説明が11日にあったとの報告がありました。6月議会で「三重用水の水を供用対象外の亀山市に供給することに反対」の請願を採択し、県に意見書を提出したことへの、県としての答えを持ってきたものです。

県の説明によると、シャープが第2工場建設を発表したのが17年1月、その10月に初めて、新たな工業用水の依頼があり（H20年夏までに）、県として検討した結果、早期の給水はムリと一度は回答しました。しかしシャープは18年1月、再検討を依頼（H21年4月までに）、これを受けて県は三重用水加佐登ダムからの取水を提示、地元の鈴鹿市に相談もせずに、2月の予算に急いで計上した、というものです。

一企業の利益を県民の利益より上におく異常さ

県は説明の中で、渇水時の農業用水の対策には「井戸を掘る」、将来の鈴鹿工業用水需要については「北伊勢工業用水の延伸」などの対策を講じるので、シャープへの取水に鈴鹿市が同意するように求めています。しかしこんな取って付けたような対策で、当座をしのごうという姿勢は信用できません。

経過からも明らかのように、無理難題をふっかけているシャープの方に非があり、そのとぼっちりを鈴鹿市にかぶせるのは間違いです。県はシャープの言いなりに動くのではなく、県民である鈴鹿市民の利益に立って、企業に対しても「ムリなものはムリ」と言うべきです。

国保税、2年で2万2千円引き下げ

7月に入って、今年の国保税が各世帯に通知されました。全体では昨年引き続いて5%ほどの引き下げになりました。この3年の比較を、保険年金課の資料でみると、下の表のようになっています。（医療費分のみ）

年度	一人当り税額	同前年比	世帯当り税額	同前年比
H18	85,866	-5.15%	163,432	-6.35%
H17	90,528	-4.67%	174,520	-5.80%
H16	94,965	—	185,271	—

東大阪市長に長尾淳三君返り咲き！

7月2日の東大阪市長選挙で、私の親友・長尾淳三君がふたたび市長に選ばれました。人口51万の大都市で三つ巴の激戦のなか、自民・公明・民主の推す現職に千票の差で競り勝ったことは、久しぶりの快挙です。

私も5月に1回、選挙中に1回応援に行きましたが、街のムードはいいものの、かならず「勝つ」との確信はありませんでした。しかし、選挙前から次々と出てきた「同和利権の不正」「市民税・国保税の増税」「村上ファンド不正」などによって、市民がふたたび「清潔・公正の長尾さん」への期待を高めたのです。

当選翌日に長尾君が電話をくれ、「わしが建てた市役所に初めて入るねん。」彼が1期目当選したとき、すでに着工寸前であった新庁舎工事にストップをかけ、大幅な建設費見直しと入札談合防止策を講じた後に着工したのですが、完成前に落選、新庁舎には入れませんでした。12日の初登庁は、長尾君にとっては格別の思いがあったでしょう。同様に、前期に手がけた政策で中断させられたものを、今度こそ実現するとの意欲を持ってがんばることでしょう。全国の地方自治体のモデルとなるような市政を期待します。

子どもの安全のため「みまもり隊」

7月14日、地元の深伊沢小校区でのボランティア組織「深小っ子みまもり隊」をつくるための第1回の会合がありました。子どもの登下校や外出時の安全がおびやかされている事態が、この農村部にも例外でなく起こっていることから、結成が呼びかけられたものです。

深伊沢小校区は、名阪インターがあり外部からの出入りが多い、スーパーやパチンコ屋ができて、窃盗や痴漢なども増えている、フラワー道路や国道306など交通量も激増している、など大きく地域環境が変わっています。一方、地域で集団で遊ぶ子どもの姿も見えなくなっています。残念ですが、のんびりと暮らしてられない、自ら地域を守ることを考えねばならない時代になってきています。

具体的には、住民がボランティアに登録して、「おはようパトロール、お帰りパトロール、おやすみパトロール、お散歩パトロール」など、出来るところで活動することになります。隊員はみんな「タスキ」を着け「怪しい人」と区別して、子どもに声かけをする、ということです。

「鹿を指して馬と為す」

「故事成句でたどる楽しい中国史」（井波律子著）を読んでいると、私たちが現代の日本でよく使う言葉の多くが、古代の中国の歴史書や文学から引用されたものであることに驚く。日本にまだまともな国家などなかった時代から、中国はすばらしい文明・文化を生み出していたのである。

よく使われる「井の中の蛙、大海を知らず」「国破れて山河あり」「覆水盆に返らず」「背水の陣」「大器晩成」「信賞必罰」などなど、千年も2千年も古い言葉が今も生きているのは、その意味が普遍的であるからだろう。

そんな中でも、「これはどういう意味だろう、語源はなんだろう」と疑問に思っていた言葉の、本当の意味が分かったのは収穫だった。

完璧 秦の王様が、趙の王様が持っている美しい玉「和氏の璧」を取り上げようと脅かしたが、勇敢な家来がこれを守り抜いた故事「璧を完うす」から転じて、完全無欠の意味を表すようになった。（前3世紀・戦国時代）

顰（ひそみ）に倣う 呉の美女・西施が胸の病になり、苦痛に眉を顰めた美しさを、醜女がまねして眉を顰めたら、ものすごい形相になったという逸話から、他人のまねをすることを指す。（前5世紀・春秋時代）

五十歩百歩 孟子が梁の恵王に「戦場で、ある者が50歩逃げて、ある者は100歩逃げた。50歩の者が100歩の者をあざ笑ったら、どうですか」と尋ね、王が「逃げたという点では同じだ」と答えたことから、少しの違いで大局的に見れば変わらないことを指す。（前3世紀・戦国時代）

先ず槐（かい）より始めよ 燕の王様が、有能な人材を求めて槐という人物に相談したところ、「まず私（槐）から」と答えた故事から、大きなこともまず手近なことから始めよとの意味になった。（前3世紀・戦国時代）

捲土重来（けんどちょうらい） 唐の詩人・杜牧が、漢の劉邦に敗れた楚の項羽を詠んだ詩で、「もう一度、土煙を巻き上げて戦ったら、勝敗のゆくえは分からなかつたらう」としたこと、敗れたものがふたたび勢力を盛り返すという意味の成句になった。（9世紀・唐時代）

最後に、表題の成句の意味は、「間違ったことを人に押し付ける」ことで、秦（前3世紀）の悪役人・趙高が、「これは鹿だ」と正直に言った部下を皆殺しにした。日本の現首相にピッタリの表現だ。略して「馬鹿」という。